第二章　日本の言葉

■テニヲハ

日本語の特徴の第一は、何と言っても“テニヲハ”であらう。これは、言語学的には、“膠着語（かうちやくご）”と呼ばれる、ウラル・アルタイ語族に属する民族に共通した言語の特徴であるが、これに属する民族は、日本民族を除くといづれも少数民族であり、その中には、満洲民族における満洲語のやうに、今は全く語られなくなってしまった言語も決して少なくはない。

世界の言語の大部分は、欧米諸語のやうな“屈折語”、もしくは中国語のやうな“孤

立語”の、この二つのいづれかに属してゐると言っても良い程なので、“テニヲハ”がウラル・アルタイ語系の言語に共通した特徴であるとは言っても、これはやはり日本語の特徴の第一に挙げない訳には行かないものである。

英語でも、孤立語の中国語でも、一つ一つの言葉の意味や役割(品詞)は、その言葉の文章上の位置によって決する。

例へば、英語の rain といふ言葉は、文頭に在って主語の働きをしてゐる時には“名詞”であって、日本語の“雨”に当るが、rain coat といふ場合は“形容詞”であって、日本語の“雨の”といふ言葉に当る。また、It rains における rain は、“動詞”であって、日本語の「雨が降る」といふ言葉に当ってゐる。

私たちと同じ漢字を使ってゐる中国語ではあるけれども、“風雨”の“雨”は日本語の“雨”と同じであって“名詞”であるが、“雨衣”の“雨”は英語の rain coat と同じく“形容詞”である。また、「某日大雨」といふ文における“雨”は英語の It rains の rain と同じで“動詞”である。(だから、漢文では「大ィニ雨フル」といふやうに送り仮名を付けて訓んでゐる)

日本語を、屈折語に属する英語や、孤立語に属する中国語と比較してみれば、その特徴がよく解るやうに、日本語は“テニヲハ”といふ膠着語だけが有つ言葉のお蔭で、言葉の意味や役割が実に明確に表現できて、耳で聞いてゐても全く紛れる恐れが無い。

これに反して、中国語の場合は、“雨”に英語の rains や rained といふやうな変化さへもない、文字通り“孤立語”なので、文章上の役割も意味も、正しく受取れないことがよく起り得る。これは、言葉の性格に因るもので、全く止むを得ない欠点である。

然しながら、短所は長所でもある。いろいろに受取られる恐れがある中国語は、そのため、文学作品においては、むしろ深い味はひがあって、曖昧な所に何とも言へない魅力が感じられる。

とは言ふものの、正確な表現をぜひとも必要とする科学的な文章には、どうしても不向きな言語のやうに私には思へてならない。昔から、文学面や思想面では非常に優れた作品が多く創作されてゐるのに、科学の面ではその割に遅れてゐるやうに見えるが、それはこの中国語の特徴に原因があるのではないだらうか。

テニヲハは、全く「概念を有たない」、膠着語特有の言葉である。屈折語や孤立語においては、前置詞がやこれに似た言葉であるが、これには概念を有ったものがあるので、決して同じものとは言へない。

また、関係代名詞として使はれる時の言葉は、本来の概念を全く表さないで使はれてゐるけれども、その言葉そのものは明瞭に概念を有った言葉であるから、テニヲハとは全く本質が異ってゐる。

中国語でも“所”といふ字が、関係代名詞として使はれる。そのため、昔の中学では、英語の関係代名詞を翻訳する時に、「……する所の……」と言ったものである。日本語には、動詞に活用といふ働きがあって、その連体形が、英語や中国語の関係代名詞の働きをしてゐるので、それを使へば「……する所の……」などと言ふ必要は全く無いのである。

テニヲハは概念を有たない言葉であるから、独立して用ひられることは全く無い。必ず概念語に膠着して用ひられるので、“膠着語（かうちやくご）”といふ名がある訳だが、このテニヲハに

よって、その概念語の文章上における役割が実に明確になることは、屈折語や孤立語では絶対に望めない程のものがある。

例へば、「僕は君に本を上げる」といふ文章における“は”“に”“を”がこれであるが、これが“僕”“君”“本”などの概念語に着いて、それぞれの言葉の有つ役割を明確に表現してゐるのである。

そのため、“僕は”“君に”“本を”といふ三つの言葉の順序をどのやうな順序に並べ替へても、意味が変化したり、混乱することが全く無い。その事は、同じ漢字を用ひてゐる中国語と比較してみればよく判ることである。

「我給你書」(実際の会話ではかうは言はないが、文章として書けばかうなる)この語順は一語といへども変更を許さない。例へば、“我”と“你”とを入れ替へたら、与へる人と貰ふ人とが反対になってしまふ。また、“我”と“給”、“給”と“你”とを入れ替へたら、全く意味の通じないものになってしまふ。屈折語や孤立語においては、語順を一定にすることを厳しく守る必要がどうしてもあるのである。

では、語順を守りさへすれば、文意が必ず誤解することなく通ずるかと言ふと、必ずしもさうは行かない。それで、中国の古典には昔から幾通りもの解釈が行はれてゐて、私たちは古典を読むたびに、そのいづれを取ったら良いのかに、いつも悩まされたものであった。(この「幾通りにも解釈できる」といふ事は、悩まされる所ではあるけれども、またそれが面白い所でもあることは、先にすでに述べた通りである)

その点、日本語は、「僕は本を君に上げる」と言はうと、「君に本を僕は上げる」と言はうと、その他、どんな語順に並べ換へたところで、テニヲハが着いてゐる限り、それらの言葉の役割(格)は判然としてゐるので、文意が混乱して通じなくなるといふことは全く考へられない。

英語は、"I give you a book."と、やはり語順を一定に守る必要がある点において、中国語と変りがない。ただ、代名詞だけであるが、"I, my, me"といふ、日本語の"僕は"、"僕の"、"僕に"といふ意味に当る"格変化"なるものがあるので、中国語よりも正確な表現が可能である。

とは言へ、"me"だけでは、"僕に"と"僕を"といふ、間接目的語と直接目的語とを区別することまでは出来ないし、その上、この格変化は代名詞だけにあって、名詞には無いので、中国語とそれ程の差は無い。

何としても日本語の素晴しさはテニヲハがあることである。テニヲハは、言葉ではあるが概念が無い。「物あれば必ず名あり」で、概念があれば、それを表すための言葉が作られるのは、人間の社会では言はば当然の事である。然し、「概念の無い言葉」……「概念を有った言葉に着いて、その言葉の役割を明確に表すための言葉」を作り出したといふことは、考へてみればみる程、実に偉大な事だったと感嘆せずにはゐられない。このやうに素晴しい言葉を作ってくれた我が国の遠い先祖に対し、私は心から尊敬と感謝の念を懐かざるを得ない。

■活　用

日本語の特徴の第二は、動詞や形容詞(助動詞にもある)に"活用"といふ変化が有ることである。"行く"といふ言葉を例にして言ふならば、「行か、行き、行く、行け」と四段に変化することである。(このやうに変化する動詞を"四段活用"と言ふ)

"行か"は、「行かう」もしくは「行かない」といふやうに使ふ形なので"未然形(未だ然らず、といふことで「まだ……しない」といふ意味の言葉である)"といふ名が付けられて

みる。前者を“将然形(将に然らんとす、といふことで「これから……しよう」といふ意味の言葉である)”、後者を“否定形”と名づけ、この二つを区別してみる学者もみるが、両者は常に同じ形を取り、しかも、“将然”も“否定”も“未然”といふ点では一致してみるので、“未然形”の名で統一した方が良いと思ふ。

“行き”は、他の活用のある言葉(用言)に接続する場合の形であることから、“連用形”と呼ばれてみる。この形は、「学校に行き、先生に会ふ」といふやうに、文を中止する時に使はれる形でもあるから、“中止形”といふ別名がある。

また、「行きは電車で、帰りはバス」といふやうに、名詞として使はれる時の形でもあるので、“名詞形”といふ名もある。英語の“不定法”や“ing”を着けた形と同じ働きをする形である。

“行く”は、“終止形”と“連体形”といふ名前を有つ。古い言葉では、この二つは異る形を取るものがあったから、別々の名前を付けて区別する必要があったけれども、現代語では、両者が常に例外なく同じ形を取るので、これを一つにして〝終止・連体形〟と呼ぶことも出来ると思ふ。

然し、古文を学習することを考へたら、やはり、現代語では全く同じ形であっても、二つに分けて“終止形”“連体形”とした方が良いと思ふ。

“終止形”とは、「文を終止する時の形」といふ意味の言葉通りの形であり、“連体形”とは、「体言(名詞・代名詞の総称で、用言に対する言葉)に連なる時の形」といふ意味の言葉通りの形である。つまり、「行く人」「行く車」といふ時の“行く”である。

この形を使へば、動詞でも形容詞と全く同じやうに名詞に接続して、その名詞を修飾できるのである。英語や中国語では、関係代名詞を使はなければ出来ないことだが、

日本語はこの連体形のあるお蔭で、関係代名詞の助けを借りる必要が全く無い。

“行け”は、「行けば良い」といふやうに仮定する時に使ふ形なので“仮定形”と呼ばれる。然し、「あっちへ行け」といふやうに命令する意味に使はれる時の形の場合は“命令形”と言ふ。

四段活用の動詞では、仮定形と命令形とが全く同じ形になるけれども、“起きる(上一段活用)”“勉強する(サ行変格活用)”“来る(カ行変格活用)”などの動詞の場合には、仮定形が“起きれ(ば)”“勉強すれ(ば)”“来れ(ば)”であるが、命令形が“起きろ”“勉強せよ(勉強しろ)”“来い”となり、仮定形と命令形とが全く異った形を取るので、二つに分けてゐるのである。

■形容詞

ここで、日本語における品詞分類上の立脚点が、英語や中国語等のそれと全く異ってゐることについて一言して置きたい。

日本語には、英語や中国語等には全く存在しない“活用”といふものがあって、これが文法上大きな働きをしてゐるために、活用の有無や変化の仕方が品詞分類上の一つの基準になってゐることである。

英語や中国語等においては、品詞は文章上の働きによって決定されるものであるから、単語だけを取り出して来て、「これは名詞である」「これは形容詞である」とは言ひ切ることが出来ないのが普通である。

ところが、日本語では、文章の働きの如何に関はらず、活用の有無や変化の仕方に

よって、品詞が初めから決ってゐるのである。例へば、“貧しい”といふ言葉は“形容詞”であり、これと対をなす“富む”といふ言葉は活用によって“動詞”と決ってゐるのである。

これが中国語だと、“貧”も“富”もどちらも形容詞である。貧と富とは対をなす文字であり、その働きは全く同じであるから、同じ品詞であるのが当り前である、といふわけである。

ところが、日本語では、“貧しい”といふ言葉は、意味や文法上の働きがどうであれ、“貧しい”といふ活用をするから“形容詞”であり、“富む”といふ言葉は、“富む”といふ活用をするから“動詞”なのである。

つまり、“〇しい”といふ活用をする言葉はすべて例外なく“形容詞”であり、“〇む”といふ活用をする言葉は“動詞”なのである。文章を読んでみて、その働きによって品詞が決る英語や中国語とは、そこに大きな違ひがあるのである。

それにしても、“貧しい”が形容詞なのに“富む”は動詞であるとは変ではないか。日本語は論理的でない……と思はれる方がきっとゐらっしゃると思ふ。然し、これが日本語の論理であり、これが日本語の素晴しい所なのである。

英語では、“述語”になる言葉は“動詞”と限られてゐるけれども、日本語では、“動詞”と共に“形容詞”がこの仕事に当ってゐる。だから、“貧しい”が形容詞で、“富む”が動詞で、少しも困ることが無いのである。

また、名詞を修飾するのは、英語では“形容詞”と決ってゐるが、日本語では“動詞”でも修飾語としての働きをするやうになってゐる。例へば、“貧しい人”に対して“富む人”あるひは“富める人”といふやうに、立派に修飾語として働けるのである。

さて、形容詞の“活用形”は、“ク活用”と“シク活用”の二種類しかない。逆に言へば、“ク”もしくは、“シク”の活用する言葉はすべて“形容詞”だといふことになる。（厳密に言へば、これと同じ活用をする“助動詞”がある。然し、これは形容詞のやうな概念を有たず、概念語に着いてその働きを助けるものであるから、容易に区別することが出来る）

今、二種類と言ったが、“シク活用”といふのは“ク”の上に必ず“シ”が着いてゐるだけのことであり、活用の仕方は全く同じである。“ク活用”は“く・い・けれ”といふ三つに変化し、“シク活用”は“しく・しい・しけれ”と変化する。

“く”“しく”は、「山が高く聳える」といふやうに、動詞などの用言（ここでは“聳える”に連なる時の形であるから、“運用形”と言ふ。然し、“連用”とは、「用言を修飾する」

といふことであるから、「副詞としての働きをする形」つまり“副詞形”と言った方が解り易いかも知れない。

英語では、形容詞に“ly”を付けると副詞になる言葉が多いが、日本語では、形容詞の連用形を使へば、形容詞はそのまま皆、副詞になるのである。活用とはこのやうに素晴しい働きを有ったものなのである。

また、この形は、「山は高く、海は広い」といふやうに、文を一時中止する時に使ふ形でもある。そのため、“中止形”といふ別名もあることは、動詞の場合と全く同じである。

“い”“しい”は、「山が高い」「花が美しい」といふやうに、文の述語として用ひられ、かつ、文の末尾に置かれた時の形である“終止形”と、「高い山」「美しい花」といふやうに、英

語の形容詞と全く同じ使ひ方、つまり、名詞(体言)に連なる形の“連体形”とある。

“終止形”と“連体形”とは、現代語では全く同じ形をしてゐるが、古語においては、「山高し」「高き山」、「花美し」「美しき花」といふやうに、形が全く異ってゐる。終止形と連体形と区分する理由はここにある。

英語では“The mountain is high.”“The flower is beautiful.”といふやうに、形容詞は、述語である動詞の補語として用ひられ、述語にはなれないのであるが、日本語の形容詞は、すでに述べたやうに、「山が高い」「花が美しい」といふやうに、終止形を使へばそのまま述語として働くのである。

“けれ”“しけれ”は、「高ければ」「美しければ」といふやうに、仮定の意味を表す時に用ひる助詞の“ば”に連なる時の形であって、だから“仮定形”と呼ばれてゐる。

■自称・対称の代名詞

英語では、自分の事を称して言ふ言葉(一人称)は“I”の一語しかなく、また、相手を指して言ふ言葉(二人称)も you の一語しかない。英語ではこれを“代名詞”と言って実に頻繁に用ひるが、わが国ではあまり使はず、使ふ場合にも“名詞”を使ふのが普通であって、それも、相手の身分の高低や親疎の度合ひに従って使ひ分けるのが普通である。

一般に、最も鄭重な言ひ方としては、自称には“私(わたくし)”といふ言葉を使ひ、対称には“あなた様”といふ言葉を使ふ。この“私”といふ言葉は、“公(おほやけ)”に対する言葉であって、本来は“普通名詞”の言葉である。また、“あなた”は、「あの方(あちらの方角といふ意味)」といふ意味の言葉であり、基本的にはやはり“普通名詞”であ

る。

“私”といふ言葉を、少し砕けた形にしたのが“わたくし”の“く”を取った“わたし”といふ言葉であり、更に砕けると“た”が抜けて“わし”といふ言葉になる。私がこの“わし”といふ言葉を使ふのは、家内に対して自称する時だけである。だから、私にとっては、「“わし”は妻専用の言葉」であって他の人には決して使ふことがない。

これが日本語の豊かさの一つである。自分の妻専用の言葉を有つ、とは何と贅沢な事であらうか。欧米諸語の貧しさに比べてみて、しみじみ有難いと思ふものである。

“わし”に対する“対称”は、普通は“お前”といふ言葉であらう。これは、「自分の前」の“前”といふ言葉であって、「自分のすぐ前にゐる人」といふ意味の言葉である。わが国では、尊敬すべき人から遠く距(へだ)たってゐて、なれなれしく近づくのは失礼だと考へられてゐるので、尊敬すべき人は“あなた(遠くの方の意味)”と呼び、最も親しい人は近くにゐるので“お前”と呼ぶのである。

私は、夫婦の間では、夫は“わし”を自称して対称には“お前”を使ひ、妻は“わたし”を自称に使ひ、対称には“お前さん”を使ふのがいかにも夫婦らしい使ひ方ではないかと思ふのだが、実際には、自称には“わし”を使ふが、対称には“お母さん”を使ってゐる。

“お母さん”は、四十二年前、長男が生れた時に呼び始めて以来の呼び方であるから、もう定着してしまったやうである。孫が遊びに来た時、孫に合せて“お婆ちゃん”と呼ぶことも稀にはある。

さて、今まで私が使ったことのある自称を列挙してみると、先づ、家内に対しては“わし”、息子と娘に対しては“お父さん”孫に対しては“お爺ちゃん”、甥と姪に対して

は“伯父さん”児童・生徒に対しては。“先生”その他の場合は“わたし”か“私（わたくし）”といふ言葉である。

これらの言葉は、皆、名詞である。“わし”を除いた他の言葉は、皆、相手が私に対して私を呼ぶ時に使ふ言葉であって、それをそのまま自称としてゐるのである。相手が私を“お父さん”と呼ぶからその言葉を使ってそのまま“お父さん”と自称するのである。このやうに、相手に応じて自称の言葉を選んで使ふのがわが国の習慣である。

幼児の場合には“固有名詞”が使はれることがある。幼児はたいてい“僕”といふ自称を使ふ前に、固有名詞である自分の名前を、自分が親から呼ばれる通りに自称として使ふものである。例へば、親から「太郎！」と呼ばれてゐる子供は、自分でも“太郎”を自称し、「太郎君！」と呼ばれてゐる子供は、“太郎君”と自称するものである。

それで、子供が“僕”といふ言葉を使って自称するやうになると、遂に、親が「太郎！」と呼ぶところを、「僕！」もしくは「僕ちゃん！」と言って呼び掛けたりする。

自称と対称とは、大よそ対になってゐて用ひられる。例へば、“私”と“あなた様”、“わたし”と“あなた”、“わし”と“お前”、“僕”と“君”、“俺”と“貴様”と言った具合である。

このやうに使ひ分けることによって、相手に対し、尊敬の心や親近の情を表してゐるのであるが、かういふ言葉の使ひ分けは、教へてやらないとなかなかうまく使へるやうにならないやうである。

だから、言葉の教育が軽視されてゐる現今では、親や教師に対して“お前”といふ言葉を使ふ子供がゐるわけである。かうして言葉が乱れて来ると、「言順ならざれば事成らず」で、親子、師弟間にあるまじき不祥事件が惹き起されるやうになるので、恐ろしいと思ふ。

■敬語法

敬語法も日本語の特徴の一つである。敬語法には、「相手を尊敬する“尊敬語”を使って直接敬意を表す方法」と、“謙譲語”を使ひ、自分を謙(へりくだ)ることに依って間接的に相手に敬意を表す方法」とある。

例へば、“食べる”といふ意味の言葉に、尊敬語としては“召上る”といふ言葉があり、謙譲語としては“頂く”といふ言葉がある。つまり、相手に対しては「召上って下さい」と言ひ、自分が食べる時には「頂きます」と言ふのである。

“居(ゐ)る”といふ言葉は、尊敬語では「ゐらっしゃる(文語の“居(ゐ)らせられる”の変化したもの)」と言ひ、謙譲語では「居(を)る」と言ふ。だから、「先生は居(を)られますか」といふ言ひ方をよく耳にするけれども、これは正しい使ひ方ではない。“られる”は尊敬の意味を表す助動詞であるが、“居(を)る”が謙譲語だからである。

また、“行く”といふ言葉は、尊敬語では「行(い)らっしゃる(おいでになる、ともいふ)」と言ひ、謙譲語では“参る”と言ふ。だから、「一緒に参りませんか」と誘ふ行き先が神宮ならば正しいけれども、映画館や劇場だったら誤りといふことになる。

また、“言ふ”といふ言葉は、尊敬語では「仰(おつ)しゃる(文語の“仰(あふ)せられる”の変化したもの)」と言ひ、謙譲語では“申す”と言ふ。これも、よく「仰しゃる」と言ふべき所に「申される」といふ言ひ方をする人が居るけれども、先の「居られる」の場合と同じで、“申す”が謙譲語なので、これに尊敬を表す助動詞“られる”を着けても、尊敬したことにならないのである。

このやうに、日本語には、通常の動詞(例へば、食べる、居る、行く、言ふ)のほかに尊敬語(召上る、居らっしゃる、行らっしゃる、仰しゃる)と謙譲語(頂く、居(を)る、参る、申

す)とあるのである。これを正しく使ひ分けることは、煩(わづら)はしいと言へば確かにさうに違ひないけれども、それが“文化”といふものである。使ひ分けを学ぶ努力を惜しんで自らを卑しめてはならないと思ふ。

すでに度々述べて来たやうに、「心の働きは言葉の働き」であるから、豊かな心は豊かな言葉でこれを養ひ育てるしか手立てはない。確かに複雑な敬語法ではあるけれども、これを正しく使ひ分ける所に日本語の良さ、豊かさがあるのである。敬語法を学ぶことにより、日本人の心の豊かさを養ひ育てて行きたいものである。

■日本語の“みる”といふ言葉

さて、日本語は、対人関係を表す言葉は実に豊富にあり、非常に微妙な使ひ方をしてゐるのであるが、動作や状態や性質などを表す“動詞”や“形容詞”では、総じて大まかな表現の言葉が多い。といふのは、外国語に比べると、抽象度の非常に高い言葉が多く、従って語彙数が意外に少ないからである。

例へば、目の働きを表した言葉には、僅かに“みる”といふ言葉が一つあるだけである。これを、英語や中国語などに比べてみるとよく判ると思ふ。英語には、“see, look, glance, inspect, observe”などの言葉があり、漢字には、「見、看、瞥、視、察、観、覧」などの文字がある。

これらの言葉や漢字を日本語に翻訳する時には、「“ちらっと”見る」とか、「“叮寧に”見る」とか、「“気を付けて”見る」とかといふやうに、“見る”の上に修飾語を着けて、二つ以上の言葉にしてこれを表さなければならない。

英語でも漢字でも、「どのやうな態度で見るのか」、その見方が極めて具体的に表さ

れてゐるのに対して、日本語は極めて抽象的な言葉が多く、これに修飾語を付け加へることにより、具体的な表現をするのである。

そのいづれが勝れてゐるかと言ふと、それは一概には言ふことが出来ない。ただ、耳に聞く場合には、日本語の方が概して受取り易いと言へるのではないか。その反対に、見直しの出来る文字の場合には、一語で表現できる英語や漢字の方が、目に入れ易いといふことが出来るのではないかと思ふ。

だから、日本語には“みる”が一語しかないけれども、漢字を使って表現してゐるのだから、日本語の“みる”に最も近い“見”を使ふのは結構なことであるが、それだけでなく、折角“看”“視”“観”“覧”といふ漢字もあるのであるから、“看る”“視る”……といふやうな表記をすれば、修飾語を使はなくても、豊かな表現が出来ると思ふ。

戦後、表記の簡易化だけが尊ばれて、“漢字の音訓整理”が行はれ、“みる”はすべて“見る”と表記することにさせられてしまったが、これは明らかに“文化の逆行”だと私は思ってゐる。

“視察”“看護”“観覧”などの言葉は実生活の中で使ってゐるのだから、「どのやうな見方をするか」に依って、“看る”“視る”“観る”といふ使ひ方をすべきだと思ふ。それが特に困難である訳がない。また、困難だから避けるといふのでは何とも情けない話である。

そもそも日本語においては、“みる”といふ言葉は、目を使ふことばかりを意味したものではない。「味を“みる”」とか、「病気を“みる”とか、目以外の器官を使ふ場合にも“みる”と言ふのである。

“嘗味(しやうみ)”といふ言葉がある。これは「味を“みる”といふ意味の言葉だが、“嘗”といふ字は、“尚”と“旨”とを組合せて作った字であって、“旨”は、食べ物が口に入ってゐる形を表した字で、わが国では“旨(うま)い”と訓んでゐる字である。それで、私は、「味を“みる”は、「味を“嘗る”」といふやうに書いたらよいと思ふ。

「病気を“みる”」は、家族が看病する場合の“みる”だったら、「病気を“看る”」と書いた方が解り易いと思ふ。然し、医者が診察する場合の“みる”だったら、「病気を“診(み)る”」と書いた方が良いと思ふ。

このやうに、「日本語の“みる”を、漢字ではどう書いたら良いだらうか」といふやうに考へて漢字を使ふならば、日本語の“みる”といふ言葉の働きがどんなに広いものであるかがよく解り、かつ、物の見方や考へ方が深まるのではないか、と思ってゐる。

“見”といふ字は、“目”と、“儿(人脚(ひとあし)といふ名があるが、元は“ㄟ”で、人が坐ってゐる形を表したもので、“人”を意味する漢字の部品)”とを組合せて作った字で、「人における目の働き」である“見る”ことを表した字である。だから、目を開いてゐれば自然に見えて来る場合の“見る”ことを表した字である。

“看”といふ字は、“手(“手”といふ字の変形したもの)”と“目”とを組合せて作った字であるから、“見”のやうに「単なる目の働きとしての“見る”」と異り、「手の働きが加はった“見る”」である。だから、「病人を“みる”にはこの“看る”がふさはしい。

ところが、戦後の国語政策は“音訓整理”と称して、かういふ表記を禁じてしまった。敗戦のショックで正常な思考が働かなくなったためであらうか。ともあれ、音訓整理は、自分で自分の頭の働きを制限したものであるから、この政策で日本人の思考が貧弱になったことは確かである。といふのは、次のやうな話をある幼稚園長から聞いた。

新任の若い先生に、「ちょっとの間、子供たちを看てゐてね」と言って、幼児たちの面倒を看るやうに指示して置いて、しばらくして帰ってみると、幼児たちはそれそれ勝手な事をしてゐて大騒ぎ。ところが、この先生は全く手を拱(こまね)いてただ“見てゐる”だけだったのである。

園長がそれを咎(とが)めたところ、その先生、「はい、先生の指示通り、ちゃんと“見て”ゐました」と、堂々と答へたといふのである。この先生は、明らかに“みる”とは“見る”だけで、“看る”といふ言葉は知らなかったのである。

確かに、“みる”といふ言葉を“見る”とだけ一律に表記させてゐる今の教育では、“みる”といふ言葉には、看病の“看る”や、診察の“診る”や、嘗味の“嘗る”や、観察の“観る”や、視察の“視る”など、いろいろの“みる”がある、といふことの理解は難しいだらうと思ふ。

いろいろの表記に蝕れてゐさへすれば、自然といろいろの“みる”が解るであらうが、戦後はそれが無くなってしまったのだから、今の若い先生の頭が貧困になってしまっても先生を咎めるわけには行かない。一刻も早く国語を建て直すことである。

■“さめる”といふ言葉

“さめる”といふ言葉は、「湯が冷める」「酔ひが醒める」「眠りから覚める」「色が褪める」など、これもいろいろに使はれる言葉である。この言葉の本義は、「ある特別な状態から、元のあるべき状態に戻って行く」といふ意味の言葉だと思ふ。

例へば、湯は水を沸かしたもので、水の特別の状態である。だから、放って置けば元の水に戻る。湯といふ特別の状態から元の水に戻って行くのが「湯が“さめる”と言ふこ

とであらう。

また、酒を飲めば、酔って頭が朦朧（もうろう）となり、快い気分になるが、放って置けばまた元の状態に戻って行く。それで、これも「酔ひが“さめる”と言ふのであらう。「眠りから“さめる”といふのも、同じことである。起きてゐるのが本来の状態であって、眠りといふ特別な状態から本来の状態に戻って行くから“さめる”と言ふのであらう。

また、色も、白いものに色づけするのが普通であるから、色づけされたものが、時の経過と共に、元の白い状態に戻って行くので、これも「色が“さめる”と言ふのだと思ふ。

このやうに考へてみると、国語の“さめる”といふ言葉は、実に抽象化された言葉であって、だから、使ひ方が実に広いのである。その代り、よくよくその意味を追求し、考へてみないと、言葉の本当の意味は解らない。

ところが、この言葉を“冷める”“醒める”“覚める”“腿める”といふやうに漢字で書き表すと、途端に、“さめる”といふ言葉が生き生きとしたものになって迫って来る感じがする。それほど、“さめる”ではもやもやしてゐたものがはっきりするのである。

だから、私は、国語を出来るだけ漢字を使って表記するやうに努めることが大切だと思ふ。漢字を選ぶといふことは、頭の良い訓練になることと思ふ。頭は使はなければ決して良くはならないのだから、漢字を使ひ分けることは大変だと言って避けてはならないのである。

ただここで注意しなければいけないと思ふ事は、漢字で表記すると、漢字の具体性のために抽象的な日本語の本義が忘れられ、更には歪められてしまふ恐れがある、といふことである。

例へば「湯が冷める」といふ表記のために“さめる”といふ言葉を“冷える”“冷たい”といふ言葉と同じ意味の言葉と思ひ込んでしまひ易い、といふことである。

この頃よく“冷めた”目」といふ使ひ方を耳にもし目にもするけれども、これは“冷める”といふ表記から生じた誤解に因るものだと思ふ。

日本語の“さめる”が、「本来あるべき状態に戻って行く」といふ意味の言葉であるから、「“さめた”目」といふのは望ましいことでなければならないが、使ってゐる所から見てさうではないから、これは誤用であると言はざるを得ない。

そもそも“さめた目”と言へば、“覚めた目”もしくは“悟めた目”と受取るのが自然である。恐らく、“冷たい目”では表現が平凡過ぎるといふことで、斬新な表現のつもりで“冷めた目”と言ったものであらうが、漢字の表記によって、日本語の本義が歪められる恐れがあることは間違ひないので、注意することが大切だと思ふ。

■“はな”といふ言葉

然し、漢字によって日本語の本義が忘れられ、歪められてしまっても、悪くないどころか良い場合もあるものである。

例へば、“はな”といふ言葉の場合がそれである。この言葉の本義は、「物の突き出た所」“突端”といふ意味だらうと思はれる。それで、“端”といふ字が“はな”と訓まれてゐるのであらう。

草花の“花”は、茎の一番先端の突き出た所に咲くものである。茎の“はな”に咲いたものだから“はな”と言ったのだと思ふ。「あの端を御覧」と言ったのが「あの花を御覧」といふことになったものであらう。だから、“花”の“はな”も本来は“端”の“はな”であったに違ひない。

また、顔の“鼻”も、顔の中で一番突き出た所である。だから、これもやはり「顔の“端(はな)”」といふ意味から“はな”と言ったものであって、“鼻”といふ漢字表記のために“花”や“端”と無縁の言葉のやうに思はれるやうになったものだと思ふ。

読者は、“端”と“花”と“鼻”とは、たまたま同じ発音の言葉なのであって、全く別の言葉、“同音異語”と思ってゐらっしやったに違ひないと思ふ。然し、本当は元は一つの言葉であって、漢字のお蔭で、これら異った使ひ方に応じてそれぞれに適合した表記が出来るやうになったため、これが同音異語だと思はれるやうになったものである。

「鼻から出る粘液」をやはり“はな”と言ふが、漢字では“洟”と表記する。この場合は“洟”といふ表記であっても、“はな”と訓むのは“洟”が「鼻から出る」からであることは容易に解ることなので、同音異語だと思ふ人はゐないと思ふ。

以上述べて来たやうに、日本の言葉は概ね大まかな表現で抽象性が強い。これに反して中国の言葉(欧米の諸言語も)は、表現が非常に細やかであり、具象的である。だから、日本語を漢字で表記するやうになって、日本語に欠けてゐた面が漢字によって補はれ、日本語は充実したのである。